

路地のフィールドワーク

加賀鳶の伝統を継承する
金沢の歴史的町並みの防災

空襲に遭うことなく、木造家屋が多く残る金沢。消防車両が侵入困難でも5分以内を目標に到着し、どのルートでホースをつないでどう消火するか日々研究怠りない。修復型防災計画の先進地、金沢の誇り高い加賀鳶の伝統に学べ

川上光彦



金沢では、市消防署と連携して活動する消防団が活躍している。加賀藩の江戸屋敷を火事から守った加賀鳶が、明治維新以降は金沢で活躍するようになり、義勇消防団として発足した。2020年6月現在49消防団があり、正月の出初式や6月の百万石行列で披露される「はしご登り」の技と心意気に加賀鳶の伝統を示している(写真1)。

金沢は城下町として発展し第2次大戦による戦災を受けなかったことから、中心部は旧城下町区域と重なり歴史的町並みを残している。歴史的建物と細街路から構成され魅力的な町並みを形成し、四つの重要伝統的建造物群保存地区(以下、伝建地区)を有している。しかし、それらの歴史的町並みは、木造家屋が密集し、消火活動が困難な狭い道路から成る木造密集市街地としての性格も持っている。そのため、市では、歴史的な建物の継承と活用を進めるとともに、そうした歴史的町並みの防災性を高めるため、「防災まちづくり条例」を定め、それにもとづいて、地区住民と防災まちづくり協定を締結して防災まちづくりにも努めている。

金沢の町並みと路地

藩政期末における旧城下町区域は約800haほどであるが、街路の延長は約190km、平均幅員は約3.2mに過ぎず、道路の面積率は約8%である。近代化の過程で整備されてき



写真2 東山ひがし重要伝統的建造物群保存地区の細街路
無電柱化や道路の石畳舗装が行われている



写真1 消防団のはしご登り
石川県無形民俗文化財 写真提供=金沢市

た幹線道路を除くと、現在利用されている道路もほとんどが藩政期由来のものであり、そうした道路を自動車時代に利用していることになる。土地区画整理事業などによる現代の市街地整備は、道路の最小幅員を6mとし、道路の面積率を20数%とすることからみても、いかに狭小なものを利用しているかがわかる。

金沢の歴史的町並みを散策すると、建物と街路がともにヒューマンスケールで心地よい。建ち並ぶ家屋による町並みとその変化や家屋からの生活を感じつつ、曲がりくねった道を歩き楽しむことができる。同じ道を何度歩いても楽しく、歴史的遺産としての贈り物である。こうした道路は伝建地区では文化財の一つとして位置づけられ保全が図られているが、それ以外の道路網も防災性の向上と両立させながら保全を図る必要がある。

伝建地区の防災

四つの伝建地区では、それぞれ防災計画を立案して防災性の向上を進めている(写真2)。主な施策としては、建物の修復時に耐震性の確保に努め、少しずつスプリンクラーの設置を進めるなどがあげられている。その他、ソフト対策が中心になるが、初期消火のため全家屋に火災報知器を設置する折に、高齢世帯も多いため隣接する家屋をグループ化して一斉に鳴動させること、感震ブレーカーの設置、避難経路の確保などに努めるとしている。また、寺院群地区では寺院の協力を得て境内に防火水槽の設置を行っている(写真3)。

☐一般的な歴史的市街地の防災

伝建地区以外の歴史的町並みも貴重な歴史的資産であるが、やはり木造密集市街地としての防災上の課題も有している。市は1982年に「特別消防対策区域」を指定し、消火対策に備えている。同区域は木造建築物の連担や消防車両の進入困難な狭隘道路などの指標にもとづいて30区域を指定して、消防対策を整えているものである。区域指定時のデータであるが、地区の平均の面積3.64ha、人口707人、世帯数234であり、木造建築物の割合97%、消防車通行不可率42%にもなる。

これらの地区毎に「火災防御計画」が定められている。発火の消防署への通知後5分以内を目標(実績としては約7分)に消防団を含む消防隊が駆け付けている。地区ごとに対応する消防団が決められ、通常の6台より2台多い8台のポンプ車で対応する。各消防団は、どの方面から火災現場にアプローチし、現地到達後ホースを連結してどのように消火するかなどの対策についてあらかじめ検討している。

また、前述のように、防災まちづくり協定にもとづいて市と地区住民が、お互い協力して防災まちづくりを進めている。これまで3地区への市事業が概ね終わり、4地区目が進められている。それらの地区の整備は、4m程度への道路拡幅や角切、ポケットパークの整備とその地下への防火水槽の設置など小規模な修復型の整備を中心としているが(写真4)、一部ではミニ区画整理の実施なども行っている。

今後もこうした小規模ではあるが地道な修復型の防災事業やソフトな防災活動を公民が連携して積み重ねながら少しずつ防災性の向上をめざすことになるであろう。こうした進め方は、歴史的町並みの保全や継承、および、既存の住民やコミュニティの結束や維持にもつながり、安全で安心して暮らせるまちづくりのための王道でもあるのだ。(4)



写真3 寺町台伝統的建造物群保存地区における寺院境内を活用した防火水槽整備事例
写真提供=金沢市



写真4 森山地区における防災まちづくり整備計画図と整備状況
「防災まちづくり協定」は、まち歩きやワークショップなどを行い、複数年度をかけて、住民の了解を得ながら締結。道路拡幅や角切整備については「防災まちづくり整備計画」をつかって道路を3種に分け、優先順位をつけて「防災道路」に位置付けられた道路から段階的に行う。整備計画図は金沢市作成
問い合わせ=金沢市都市整備局市街地再生課



参考文献

- ① 川上光彦、金沢市における歴史的町並み保存の特徴と課題、市史かなざわ、第5号、1993.3
- ② 金沢市、金沢市地域防災計画、2019.5
- ③ 川上光彦他、歴史的密集市街地における町並み保全を考慮した居住環境整備計画に関する研究—金沢市における事例研究—、日本建築学会計画系論文集、Vol.77 No.673、pp.573-582、2012.3

かわかみみつひこ
公益社団法人金沢職人大学校理事長・学校長、金沢大学名誉教授。金沢市に生まれ、京都大学で建築と都市計画を学ぶ。金沢大学で都市計画を担当しながら、地域のまちづくり活動にも参加、工学博士。石川県都市計画審議会会長、NPO法人金澤町家研究会理事長などを務める。著書は「都市計画(第3版)」森北出版、「地方都市の再生戦略」(編著)学芸出版社、「人口減少時代における土地利用計画」(編著)学芸出版社など